

2025年7月

『パンに書かれた言葉』 小此木啓吾／著 ABC 出版 1983

2025年8月

7月の課題本から広げる

◆◆◆8月の読書会から

先月の課題本『パンに書かれた言葉』からつながる、各自が選んだ本を読みました。参加者が選んだ本は以下のとおりです。

著書名	作者・著者	出版社・出版年
希望のヒロシマ～市長はうったえる～	平岡敬	岩波書店・1996
HIROSHIMA 半世紀の肖像	大石芳野	角川書店・1995
原爆裁判 アメリカの大罪を裁いた三淵嘉子	山我浩	毎日ワNZ・2024
彼岸花はきつねのかんざし	朽木祥／作 ささめやゆき／絵	学習研究社・2008
彼岸花はきつねのかんざし	朽木祥／作 ささめやゆき／絵	学研教育出版・2015
光のうつしえ 広島 ヒロシマ 広島	朽木祥	講談社・2013
八月の光	朽木祥	偕成社・2012
八月の光 失われた声に耳をすませて	朽木祥	小学館・2017
パンに書かれた言葉	朽木祥	小学館・2022
夕風の街 桜の国	こうの史代	双葉社・2004
へいわとせんそう	たにかわしゅんたろう／ぶん Noritake／え	ブロンズ新社・2019
戦争するってどんなこと？	C.ダグラス・ラミス	平凡社・2014
チンチン電車と女学生	堀川恵子 小笠原信之	講談社・2015
普天を我が手に 第一部	奥田英朗	講談社・2025
ガラスの梨 ちいやんの戦争	越水利江子／作 牧野千穂／絵	ポプラ社・2018

著書名	作者・著者	出版社・出版年
AI とカラー化した写真でよみがえる 戦前・戦争	庭田杏珠 渡邊英徳	光文社・2020

(文責:森下)

竹原読書会 8月 どうぞ「戦後」が つづきますように
今日が「新しい戦前」ではありませんように

吉川五百枝

『へいわとせんそう』 たにかわしゅんたろう／ぶん Noritake／え (ブロンズ新社・2019)

モノクロームの絵が、たにかわしゅんたろうの言葉を形として表していく。
言葉は短く、モノクロームの絵は、線も面も単純である。
「平和」も「戦争」も、漢字表記にすると膨大な量の情報が含まれる感じで、つい構えてしまう
のだが、それ自体は意味を持たない記号としてのひらがなを使われると、なんとなく日頃の
手近な事のように感じられる。

つまり、言葉も読者任せ、絵も読者任せ。「おすきに受け取って、日頃のまま考えてください」
と自由度満点の絵本だ。

絵本を開いた左右のページが一对になっていて、「へいわ」の左ページ、「せんそう」の右
ページと進む。途中で 4 ページで一对になっているところがある。対比する言葉も「へいわ」
と「せんそう」ではなく「みかた」と「てき」になる。そして絵は、髪型や洋服の形が違うだけで両
者は同じ顔をしている。そのページ以後、「みかた」と「てき」の言葉で考える。両者は同じ朝
日を見るし、「みかた」とよばれる「あかちゃん」と「てき」とよばれる赤ちゃんが登場するが、全
く同じあかちゃんの絵が 2 頁続いて終わる。それで考える。

「戦争」と「平和」が、これほどくっきりと対比されると良く解る。しかし、「平和」の顔をした
「戦争」はないのだろうか。「戦争」は、「戦争」の顔をみたときは、既に、「敵」「味方」に分断さ
れ、十分な武器が用意されているのではないだろうか。

日本の「戦後」の顔が、「戦前」の顔に挿げ替えられようとしていないか。「戦い」を想定した
「敵」がつくられて「戦う前」の「平和」モードが醸し出されていないか。

同じ赤ちゃんの絵を使って「みかたのあかちゃん」「てきのあかちゃん」と区別されたこの本
の終わり方が、始末に負えない人間の性を見せつけている。

「中学生の質問箱」

『戦争するって どんなこと?』(C・ダグラス・ラミス／著 平凡社 2014)

10 年前、この本が書かれたときに、日本国憲法の第九条が揺れていると書かれていて、
10 年経った今、もっと揺れているにしても、第九条が実際に書き換えられる状態にはなって

いない事に安堵している。めまぐるしい世の中の流れの早さでも、この本の題名は、変わらずに問題として流れに抗する大事な岩のように感じられる。

この本の著者は、アメリカ合衆国で 1936 年に生まれた。9 才で今次大戦が終わり、大学卒業後、アメリカ軍の海兵隊で将校として 3 年勤務した。大阪外大で日本語を勉強。海兵隊の訓練の様子も少しは書いてあるが、人の考え方は、簡単には変わらないという言葉が印象的だ。著者を変えたのは、数年間の助走期間があって出会った日本国憲法の文言だった。この本は、中学生の質問に答える形で構成されている。

- ① 日本は戦争できないの？
- ② 戦争ってどんなことするの？
- ③ どうして戦争はなくなるの？
- ④ 日本が戦争できる国になったらどうなるの？
- ⑤ 沖縄から考えるってどういうこと？
- ⑥ 軍事力で国は守れないの？

それぞれの質問に答えて 223 ページ。これだけの短さによくまとめたものだとも思えるのだが、さっと読んでも頭に残っていることがいくつかある。

②の中で。

〈兵士の仕事は敵を殺すことです。〉〈海兵隊で、死ぬ訓練をした事は一度もありません。〉〈軍の特徴は、人を殺すことです。〉〈普通、簡単には人を殺せません。〉〈相手を殺せるように、殺すことに対する抵抗を乗り越えるための訓練をします。〉〈敵を人間以下の存在と思えば、殺しやすくなります。〉〈戦争を始めると、新しい差別用語がたくさん発明されました。〉〈戦場に出ても、相手を殺せずに帰ってきた人も大勢いました。〉〈戦争の現場に適応していく人もあります。〉〈人を殺すという大きなストレス。PTSDです。〉〈飛行機による攻撃では、どこでも攻撃します。それで戦争が早く終わるという考え方があります〉〈アメリカでは、広島と長崎の原爆攻撃で、戦争を早く終わらせたから、それは人道的だという考えがあります。〉〈空爆は無差別殺人です。〉〈核兵器を使うかも知れないと思わせなければ、抑止力にはならないから、そういう動きをします。〉〈空爆で住めなくなると、各地で難民が生まれます。〉〈人の感性が鈍くなってきます。〉

〈兵士も大変なめにあうし、普通の人もたくさん殺されるし、難民の数も半端じゃない。なのにどうして戦争は無くなるの？〉

その考察が③だ。著者は、こうして、戦争とはどういうことかを積み上げていく。

1941 年 8 月、近衛文麿首相の直属機関「総戦力研究所」は、この戦争は長期化し日本必敗というシュミレーションを報告していた。しかし机上の演習と実戦は違うのだという軍部の押しでその 12 月に開戦した。シュミレーションが、日本必勝を示していたらどうなっていたか？やはり、開戦していただろう。予想が勝っても負けても、戦争は始まっただろう。

戦争の目的について〈「集団強盗」「領土」「資源」「宗教」「国家権力」「国内弾圧」「軍需産の儲け」〉と挙げている。これらが絡み合っただけで戦争を起こしやすい世界的な社会構造になっているのだと説明される。〈戦争に行けそうな若者が育った段階で、次の戦争が起きている〉という説が紹介されてもいる。

著者は『西部戦線異状なし』（レマルク 秦豊吉訳 1955 年 新潮社）を何度か取り上げてい

る。私も、何十年か前に『西部戦線異状なし』で、戦争というものの虚しさを深く感じた。〈戦争は やるもんじゃない。〉まことにその通りである。

『パンに書かれた言葉』から広げる

◆【YA】

近代に入って地球上で一体どれだけの、国と国との戦争が行われてきたのだろう。第2次世界大戦に限っても、世界中での戦死者は5400万人から8000万人とも、言われている。今まで想像を絶する人間の命が消えていることになる。日本でも、軍人230万人、民間人80万人、計310万人が亡くなっている。終戦から今日まで、日本は辛うじて80年間、戦争を回避している。しかし現在世界のあちこちで、戦争が起き、今までの戦争をしてきたことの反省や、戦争は絶対悪だとの思いは、何処に行ったのだろうと思う。

又今世界は、核を科学者が造り続け、それを保有している国が、9か国もある。核使用も厭わないとする国もある。核の使用がどんな地獄をもたらすのか、広島、長崎の実情を世界の指導者は、一度自分の眼で知るべきだと思う。核抑止論が浮上しているが、何の意味も無いし、危険そのものだ。現在の地球上には、核が溢れている。

このような状況下で、戦争を食い止める事が出来るのは、外交だと思う。武力外交は論外だ。常日頃からの、お互いの国の人々や文化を理解し信頼関係が最も大事だ。福田康夫元首相が「戦争回避へ尽くすことが、国の指導者、政治家の役目だ。戦争をしなければならない状況を作らない、それに全力を尽くすのが、政治家の役割だ。」と。そのとおりだと思う。武力に頼ってはいは、希望は見えない。

そもそも戦争は、人間性を壊してしまう殺戮、殺し合いの世界、お互いの国には、いつまでも消えない憎悪しか残さない。

ローマ教皇パウロ2世が、広島でのスピーチで言い切った。「戦争は人間のしわざです。過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです。」又数年前に日本を訪れたフランシスコ教皇も説いた。「人の心にある最も深い望みの一つは、平和と安定の望みです。核兵器や大量破壊兵器を所有することは、この望みをたえず試練に、さらすことになるのです。」

◆【JM】

『HIROSHIMA 半世紀の肖像 ～やすらぎを求める日々～』 大石芳野／著 角川書店

7月の課題本「パンに書かれた言葉」の中の「名前しかない人はいない 数でしかない人はいない」で思い浮かべたのは近所に住んでいたおばあちゃんである。母を娘のように可愛がり、私を孫のように可愛がってくださった。おばあちゃんは夫を原爆で失い、徴兵されて朝鮮にいる間に家族5人全員を原爆で失ったおじいちゃんと再婚し、暖かい家庭を築いておられた。

この本の中で、家族に囲まれ、カメラに穏やかな笑顔に向けておられるおばあちゃんだ

が、心の中には人には言えない叫びがあったと思う。事実、私の母には吐露されたことがあるようだ。

この本は著者の大石さんの丹念な取材による写真と文章で構成されている。大石さんはカメラマンで、「戦争、内乱後の市民」をテーマに、ベトナム、アフガニスタン、カンボジア、コソボ、沖縄、広島などを取材して撮影されている。

この本には174人の被爆者の写真と人生が綴られていて、この中におばあちゃんもいる。写真を見て、文章を読んで胸がいっぱいになるが、この人たちは多くの被爆者の中のごくごく一部の人たちだ。ここには広島駅で被爆した母の友達のミツコおばさんも、市役所で被爆した私の友達ヨリちゃんのお母さんも、両親を探して焼け跡を歩き回ったチトセおばさんもない。

原爆は、多くの多くの人の人生を終わらせたり変えたりした。広島平和記念公園を訪れた外国人観光客が、「公園に落ちたから被害が少なくてよかった」と話しているのを聞いて、中島地区の復元活動が始まったと聞いた。中島地区は広島で1番の繁華街で、旅館、食堂、映画館、店などがぎっしり建ち並んでいた所だ。それを実感してもらおうと1軒1軒調べて地図を作り、写真や記憶から映像まで作っている。

沖縄の平和祈念公園の平和の礎(いしじ)には沖縄戦で亡くなった1人ひとりの名前が刻んである。それを見た時、あまりにも膨大な人々の数に圧倒された。広島を訪れた人は是非とも国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に立ち寄って欲しい。「名前でしかない人はいない 数でしかない人はいない」が実感できると思う。

巻末には「もう一つのヒロシマ 毒ガス島」として大久野島の毒ガス被害者の取材が14ページにわたって掲載されている。毒ガス製造に関わらせ、亡くなった方や、今も呼吸器障害などで苦しんでおられる方がいる。ここで作られた毒ガスは実際に中国で使用され、被害を与えてもいる。

なんで戦争なんかするんだろう、なんで核兵器なんか作るんだろう…この怒りや哀しみを忘れてはいけない。

◆【伊達悦子】

8月の課題本 戦後80年

事実を事実として子ども達につなぐとき

『ガラスの梨 ～ちいやんの戦争～』越水利江子／作 牧野千穂／絵

戦後80年の今、当時の事を語れる人が少なくなっている。半面、現在の状況をあたりまえと感じる人たちが、多くなっている状況である。戦争の本質を、事実を通して(向き合うことが辛く、厳しいものだが)考え、どう行動するのかを深く考え、繋いでいかなければならない。今年の広島の平和宣言の中で、市長、子ども代表、県知事と戦中、戦後を生き抜いた人たちの「語る」をつないでいくことが、今を、未来の平和を維持できるとの宣言だった。戦中戦後生き抜いた人の「生の声(語り)」が少なくなるなかで、自分のこととして捉え、音楽、絵画、文

学等出来るやり方で「生の声(語り)」を伝えていこうと。今回紹介した本の著者越水氏も、事実が「語られること」「受け継がれること」でなければ、将来の平和は維持できないと考える一人で、自分の母親の体験をていねいに聴き取り、資料も深く読み取り、戦争の「事実」を笑生子の視点で「みせ」、その情報なかで戦争のもつ本質を考えさせる作品であったと思う。過去の戦争の厳しい現実と向き合うことは、現在を、これからをどう生きるかにつながっている。児童文学のジャンルに分類されているが、大人にも読んで欲しいと考え紹介したいと思います。

物語は、昭和十六年の夏の終わりから始まる。舞台は大阪。主人公笑生子(えいこ)は、国民学校の三年生。同年齢の子どもよりも小さく、人なつこいことから成生兄さんから「ちいちゃん」と呼ばれるようになった。働き者の両親や兄、姉、弟と一緒に仲良く暮らしていた。周囲のみんなからも「ちいちゃん」と愛称で呼ばれるほど大らかに、豊かな感性を育まれていた。しかし、この後の時は、過酷なものであった。この年の十二月には、太平洋戦争が開戦し、優しかった兄(次男)の成年は徴兵されわずか四ヶ月で戦死してしまう。人との別れだけでなく、動物たちの別れの事実は、戦争の激化を物語る。食料は不足し、東京の上野動物園では、飼育している動物が次々に殺された。天王寺動物園でも十月にヒョウやライオンなどの猛獣を毒殺するように大阪市からの命令が下った。空中戦で猛獣が逃げ出し大変な事態になると考えられての処置だが、それ以前にキリンや、カバは、すでに飼料不足のせいで死んだり、餓死したりしていたことを飼育員のねずみのおちゃんに語らせる。(成生も動物園の飼育係だった)家庭で飼っている犬さえも軍部の食料として献納しなければならないという窮乏した状況になるが、人間にも動物にも生き抜くことが難しいなかで、笑生子は子犬のキラを守り抜こうと考える。自分の周りに迫る死、飢餓の厳しい世界を身近な事実からどう行動するかを考えさせる。身の回りに起こる「事実」をふるえながら刮目し、「戦争の本質」を感じ取っていく笑生子だった。

大阪を含む地方の空襲、日本についても克明に、事実を事実として物語っている。アメリカ軍による爆撃の詳細についても笑生子を通して語られている。三月の大阪大空襲では、「B-29」戦闘機から投下される焼夷弾によって町は焼き尽くされていった。焼夷弾は、日本の建築物が木と紙の文化であることから焼夷弾を投下することで建物や樹木を焼き地上を火の海にして町を焼き尽くします。焼夷弾が人間の体にも突き刺さり発火した壮絶なことも目撃させます。また「P-51」戦闘機の威力の前では、日本軍は、なすすべがなかった事実も笑生子は感じ取ることができた。笑生子は、かろうじて生きのびることができたが、家は燃えてしまい、お母さんは腸の病気になっても治療を受けることができない。身を寄せた長兄の家では、兄の家族に気を遣いながら、母の介護を続けていく。戦局が厳しくなり、生活も厳しくなれば人の心も荒んでくる人間の弱さ(?)も経験する。人を恨んでも仕方のないことであり、人間とは生来自分を守っていこうとするものがあると、笑生子に気づかせていく。生来笑生子は、相手の中に悪を見つけるのではなく、すべてを穏やかに受け止める逞しさがあつた。7月からアメリカ軍は、大阪を含む日本全国の中都市に(軍需工場や軍港の町)原爆模擬爆弾「パンプキン」を30都市、50箇所にと落としていたことも後書きに書かれている。30都市の中には、大阪はもちろん広島県では呉、福山に投下された。大阪では、住宅地に投下され爆風で7人の死傷者がでた。目標地点に確実に原爆を投下するための模擬訓練であ

り、爆弾の威力を確認するための実験であった。投下後の原爆投下の事実を知った笑生子は、広島に帰ったねずみのおっちゃんのことを心配します。終戦後苦しい生活は続くが、目の前で友達が焼夷弾で焼け死ぬこともない。平和を取り戻した中で、キラはその命を全うして死んでいく。戦時下で多くの「死」を見てきた笑生子だが、キラの命を守ってきたことは彼女の誇りであったに違いない。

戦争を後世に伝えていきたいという作者の覚悟を感じる本でした。戦争の本質をきちんと捉えるためにも多くの子ども達に伝えていきたい一冊です。そして、戦争を知らない大人も子ども達といっしょに読んでほしい戦争文学でした。

◆【 T 】

『夕風の街 桜の国』 こうの史代／著

『夕風の街』は、原爆投下から 10 年後の広島市基町にあった原爆スラムを舞台にした話で、13才で被爆し23才まで生き延びた皆実を中心として書かれている。

皆実は、父・妹・姉を原爆で亡くしたが、働きながら母と一緒に懸命に戦後を生きていた。友達と一緒に可愛いワンピースを作ったり、同僚に告白されたり、時には靴が減るのが勿体ないから裸足で帰ったり、近くで採れた雑草を食べたりしながら青春の日々を送っていたが、原爆の傷は体にも心にも深く残り、これでいいのか？何事もなかったように生きていていいのか？と自身にいつも問い続けていた。

〈しあわせだと思えば 美しいと思えば すべてを失った日に引きずり戻される おまえの住む世界はここではないと誰かの声がする〉〈うちはこの世におってもええんじやと教えてください 十年前にあったことを話させてください そうしたらうちが死なずに残された意味がわかるかもしれん〉

あまりにも悲惨で苦しい経験なので、それを声に出すことができず、あまりにもたくさんの死が身の回りにありすぎて、戦後 10 年たっても自分が生き続けてもいいのか苦しんだ。原爆は、爆発も怖い、その後何年にもわたって被爆者を死に追いやったり、いつ死ぬかわからない恐怖を与え続ける。皆実と同じように苦しんできた人がたくさんいるのではないだろうか。

『桜の国』は、原爆投下から 40 年後と 60 年後の世界で、皆実の弟の旭と姪の七波が中心になって話が進んでいる。旭の子どもの七波と風男は被爆二世となる。七波は自分が被爆二世ということで、〈弟の風男もわたしも いつ原爆のせいで死んでもおかしくない人間とか決めつけられたりしてんだらうか〉と考える。ほのぼのとした日常生活の中に影を落としている原爆。60 年経ってもいつまでも人々を苦しめ続けていることに怒りと情けなさを感じた。

作者のあとがきの中に、〈広島と長崎以外の人は原爆の惨禍について本当に知らないのだという事にも、だんだんと気付いていました。……知ろうとしないのではなく、知りたくてもその機会に恵まれないだけなのでした。〉とある。広島に住んでいる私たちは原爆について学び、平和について考え続けていくと共に、原爆の惨禍について語っていかなくてはいけない

と思う。

◆【 N2 】

『原爆裁判 アメリカの大罪を裁いた三淵嘉子』山我 浩／著

7月の読書会以降、朽木祥著『かげふみ』、『八月の光』を読み、私は原爆や被爆者を言葉として知るだけで、本当は知らないのだと思い、この原爆裁判の本でその理解を深められたらと思いました。

原爆が開発される20年程前にベルギーの鉱山会社ユニオン・ミニエール社の社員エミール・サンジェは当時の植民地コンゴでウラン鉱石を発見し、秘密裏にニューヨークに運びました。1937年ドイツ人科学者がウランの核分裂反応から高エネルギーが得られることを発見し、これ以降、仏国、英国もウランを欲しがりましたが、サンジェは1941年米国の参戦を商機到来と捉え、米国に保管していたウランとコンゴの在庫ウランを全て米国に売却しました。1941年北アフリカ戦線でドイツに大敗した英国が米国に原爆開発推進を働きかけ、1944年9月には米、英が核に関して、「原爆完成時の日本への投下の意思確認と、将来の核開発に関する協力と核管理」、についての秘密協定が結ばれました。そして1945年の原爆投下時にはミニエール社はベルギーの国家予算を上回る収益を手に入れました。戦後ソ連はドイツに隠されていたウランを手に入れ、1946年12月ドイツ人科学者の建設した原子炉で原子炉内核分裂が臨界点に達しました。ソ連の成功以降米国はサンジェを監視下に置き、更なるウランの増産を要求し、コンゴがベルギーから独立する1960年までに米国と英国は大量の原爆を作り出せる量のウランを手に入れました。因みに米国は1945年から1960年までの194回に亘る核実験を行い、ミニエール社の1960年のウラン取引公表売上は現在(2024年)の価格で年間2000億円近くとなりました。

原爆投下後、その破壊力と、放射性物質についての報告書、資料のほとんどは、米国の管理下に置かれ公開されず、発表されたのは「人体に悪影響は及ぼさない」というものだけでした。1946年ニューヨーカー誌の記者ジョン・ハーシーがGHQの目を盗んで広島に入り2週間にわたって6人の被爆者にインタビューし被爆者の視点からの原爆の恐怖を取材し発表、これにより世界は初めて被爆の惨状を知ることとなりました。

原爆裁判の1955年当時、被爆10年経っても被爆者に対する援護策は何もとられていませんでした。この裁判の原告5人は米国の原爆投下は国際法に違反するとして、その受けた損害の賠償を日本政府に請求しました。裁判は8年に亘り、1963年東京地裁は請求を棄却しましたが、「原爆投下を違法」とし、あわせて、国が高度成長下に何も救済策を執らなかった「政治の貧困」を指摘したことが国内外に影響を与えました。裁判の目的は、「被爆者救済」と、「核兵器禁止」でした。この8年に亘る裁判の全期日の口頭弁論8回に関与していたのは三淵嘉子裁判官一人でした。その後日本政府は被爆者援護の為に被爆者健康手帳の交付、医療の給付、健康診断、健康管理手当等の法制度を整備してきました。

原爆裁判の国際法への影響は1996年国際司法裁判所が「核兵器の使用や威嚇は一般

的に国際法に違反する。ただし国家存亡の危機には合法とも違法とも判断できない」との勧告的意見を発出しています。このどちらとも取れる一文が核抑止論に繋がっています。1963年の原爆裁判は1996年の国際司法裁判所の勧告意見を経由しては2021年核兵器禁止条約へと継承されました。現在核抑止力の維持に年間14兆円超が投入されていると言われています。「核を持つことが一番安上がりの防衛」という方もいますが、核使用後の悲惨さは言うまでも無く、その開発、維持、使用後の被害、被害者への救援、原状回復、等々にどれだけの資金が必要かを考えると決してそうでは有りません。核兵器以前であれば抑止が破られても再建の道は残っていましたが、放射線の影響は世代を超えて続きます。核戦争になってしまえば、人類も地球も再生不能となる事は想像できます。

7月の課題で学んだ「言葉」の大切さ、「伝えること」の大切さ、「文明が戦争を抹殺しなければ、戦争が文明を滅ぼしてしまう」いわれるとおりです。「兵戈無用」。

広島県外に育った者として、今、広島に住み、改めて原爆やその被害に遭われた方々を身近な友としていろいろ学ばせて頂きました。

◆【KH】

『普天を我が手に』第1部 奥田 英朗／著 講談社

読売新聞日曜版に書評が出ていたのが、そもそもこの本を手にとったきっかけだった。戦後80年、昭和元年から100年経った今、昭和史を書いてみようと思ったと。(作者談)私の両親は大正15年(1926年)と、昭和8年(1933年)生まれ。大正15年から元号改め昭和元年は1週間しかなく、明けてすぐ昭和2年となったことは、生前の父からよく聞かされていた。年号を眺めながら初めて思い当たったのは、父は10月14日生まれだから、生まれて2ヶ月少しで、年号が変わったことになる。

海の向こうでは1929年アメリカで大恐慌が起こり1930年代まで余波が続いたという。日本はというと、第1次世界大戦後の戦後恐慌、1923年の関東大震災、その後の震災恐慌、さらに金融恐慌から昭和恐慌(1931年)へ。両親の幼少期はまさに世界中が恐慌真っ只中。ということになる。父母にもっと話を聞いてみればよかったのか、いたって牧歌的な話しか記憶には残っていない。私の頭が牧歌的だったということだ。もっとも、父の方は私が問えば、例えば戦争に向かって世の中が動いて行く様子、父のみた当時のことは話してくれたのかもしれない。出撃前に終戦を迎えた、少年飛行兵だった父は、相手が女子だったせい、いや全く興味を示さなかったせいだろう。様々な思いを胸に収めたまま、戦争については一言も語ることはなかった。そんなわけで、フィクションとは言え、100年を俯瞰した小説は読んでおきたいなと思ったわけだ。

1918年(大正7年)に第一次世界大戦が終結すると、1920年(大正9年)には特需も終わりを迎えます。停滞していたヨーロッパの輸出貿易が正常化し、日本の輸出需要は急速に低下、経営難によって倒産する企業もありました。大戦景気の反動で製品が売れなくな

り、日本は戦後恐慌に陥ります。(ウィキペディアより)

話を、小説に戻して、当然太平洋戦争に突入するまでの詳細が書かれているだろうと予測した。それにしてもこの本のボリュームに、まず圧倒された。3センチは優に超える600ページの第1部。こんなに分厚い本に挑むのは初めて。まあ、嫌になったらいつでもやめればいいのだからと、尻込みする自分を励まし、ページをめくった。

まず、うまいこと登場人物の設定をしていくなあと感じた。月刊誌に連載されていただけあって、1話完結。次の章に話が続くことがないので、読みやすかった。昭和元年(たった1週間しかない)生まれの4人の赤ちゃんが激動の時代に次々と誕生する。陸軍士官の4番目の待望の男子、士郎。満州生まれの満。金沢の賭場の親分が預かっていた、得意先のお妾さんの落とし子、四郎、そして、『青鞥』を思わせる女性誌編集者の子 ノラ。

おそらく、第2部ではこの4人があれこれ絡みあいながら、話が展開するのだろう。第1部で登場する4人はそれぞれに、違う世界で生きるこどもとして、主には親世代が中心に描かれる。

大きな時代のうねりに抗えずに、世界大戦の渦へと突入していったと言えそうかもしれない。なんとか戦争を止める手段、方法はなかったのか。凄惨な結果、歴史を知らずに読み進めるのは辛い。しかし、情報に溢れたいまならば、戦争へのうねりを止められたのだろうか？ 冷静な正しい判断を下せたのか？ 答えは NO! いまを生きる私たちこそ、抗えない大きなうねり、の真っ只中におり、安易に流されて生きているのではないか。考えることを放棄していないか。作中にあった一言に、どきりとした。陸軍参謀本部の“内田寛治”なる人物に絡まれた竹田耕三の心の声。「---今の陸軍では、自分が少数派であることを改めて思い知った。もっとも、だからこそ守るべき立場がある。危険なのは全員が同じ方向を向くことである。」その通りだ。違う意見が抹殺されて戦争への道を突き進んだのだから。

国家総動員法とか、軍部の独走とか、国民の狂信的国威発揚ブーム。「軍隊というところはね、トイレ以外1人になる場所はない。1人で考えることを徹底的に人間から奪う組織です。」と大田堯さんは言われたことがある。平和への道は、溢れかえる情報をふるいにかけて、一人一人が考える所から始まるんだ。

なんとかこの悲惨な戦いを止めるべく動いた人々も描かれている。

本書に出てくる、陸軍少佐 竹田耕三。彼は、財閥、実業界にもつながりが深く、軍閥よりももっと風通しの良い、人脈を持つ人物として、戦争拡大に反対する「5 日会」を主宰していた。昭和15年に、米国大使館附陸軍武官としてアメリカへ派遣される。が、彼の努力もむなしく、というか戦争回避への手がかりを掴めぬままに、日本は 12 月 8 日、開戦の日へとなだれ込んでしまうのだ。

この本は小説だから、歴史的事実に関する賛否や、意見は述べられていない。それでも、満洲国健立に至るまでの、関東軍の軍事行動、張作霖の息子、学良の策士ぶりを中国人の曹平に語らせている。「満洲に戦を持ち込んだのは、日本人だろう」と。「これは支那にとっては抗日戦なんです。誰が講和になんか応じますか。漢人は10年、20年と戦争を平気で続ける。略 日本は泥沼に足を突っ込んだんですよ」と。全くその通りだと思った。

私が読みながら実感したのは、始めた戦争を停めることは、本当に難しいということ。

一旦海外への侵略行為という一線を超えれば、その後雪だるま式に侵略を繰り返す泥沼に、はまってしまうということ。

外交＝交渉の大切さということ

のりくつと相手をおかしつつ、好機を狙う、狡猾な外交というのは、多分日本人の最も苦手とする、というか卑怯者と嫌悪される態度だろう。しかし、時間稼ぎをしつつ相手との妥協点を探る、息の長い交渉。世界を相手に、色々な価値観にたって、感情的にならずに話し合う。そんな交渉ができる人、我が国にはいまも昔も存在するか……うーん難しいなあ。無理難題を押し付けられそうになったら、高杉晋作ばりの押しの強い武士を連れてきて、朗々と古事記を詠じてもらうしかない。

当時のロシアと中華民国と満州の地図を見れば、日ソ中立条約なんてあつという間に吹き飛ばされても当然、海岸線のない国境線はあつという間に越えられてしまった。歴史にタラレバはタブーだけれど、朝鮮を経て中国へ領土拡大、日露戦争の戦果でさらなる勢力拡大路線を取っていた、挙句に国際連盟を脱退。欧米に睨まれ、中国、ロシアに呆れられても仕方がない。この本に関連して、『駐日米国大使 ジョセフ・グルーの昭和史』太田 尚樹 PHP 研究所 2013 年 3 月 27 日発行 こちらもオススメです。

◆【 K子 】

『チンチン電車と女学生 1945 年 8 月 6 日・ヒロシマ』堀川恵子・小笠原信之／著

(講談社)

実在した広島電鉄家政女学校の話です。現在はその影すらありません。少女たちはどんな思いで学校に通いチンチン電車の運転台に立ったのだろうか。どんな思いで切符にパンチを入れていたのだろうか。ピカドンの広島の町で青春の二年半をどのようにおくれたのだろうか。そして今、あの日をどう振り返るのだろうか。チンチン電車と女学生にまつわる戦争秘話の記憶が風化しないことを願って堀川、小笠原の二人のジャーナリストは、元女学生を訪れ 60 年前の話を聞いて回ったのです。そして本になりました。

幻の女学校

広島電鉄家政女学校は、勉強しながら給料がもらえるという「うたい文句」のもと農村・漁村から男手不足を埋めるために集められました。花・の・都・広島・・を知らない、女学校に進学できる魅力、進路に悩んでいた少女たちにとっては好条件のようでした。

入学当初は、午前中は授業、午後からは電車について先輩の男性の指導、実技訓練等多岐にわたる学びでした。彼女たちは必死でした。実地訓練も初めは男性と言うコンビでしたが…戦禍が激しくなってくると女学生たちの肩にすべてがかかってきました。最後には机上の学習だけでいきなり上級生と組んで乗務する始末。8 月 6 日午前 8 時 15 分、乗務していた少女はいたのです。後日、自分は元気なのでと地獄絵図の中、友達をさがす人もいました。二年半と言う(14, 15, 16 歳)短い時間でしたが寝食を共にした寮生活には、深い絆が産まれていたのでしょう。女学生たちの後日談には「恋バナ」もあり。胸につけていた名札の

お陰で(?)運転席に手紙が投げ込まれたり…。「ポツと」する時間もあつたようです。戦争という究極の状況のなかでまさに国策に翻弄された女学生でした。

著者

堀川 恵子 1969 年広島県生まれ ジャーナリスト

小笠原 信之 1947 年東京生まれ 北海道新聞記者を経てフリー

◆ 【 望月悦子 】

『希望のヒロシマ』 平岡 敬／著 岩波書店

以前の読書会で、大江健三郎著の「広島へのさまざまな旅」の課題で「広島」と「ヒロシマ」の違いについて学び合ったことがあります。今回の推薦の「希望のヒロシマ」は「広島」だけの問題ではなく全世界の人々が考える「ヒロシマ」の問題でもあります。

著者の前広島市長の経歴は、大阪市住吉区に生まれ、ソウルと広島市で育っています。早稲田大学卒業後、中国新聞社へ入社。常務取締役編集局長、中国放送代表取締役社長などを歴任した後、1991 年 2 月 3 日広島市長選挙で初当選。1995 年には再選を果たし、1999 年までの 2 期 8 年にわたり在職しています。平岡氏は現在 97 歳で今なお平和について関わっていらっしゃいます。今回の推薦本は、市長時代に被爆 50 周年を迎えて行った活動と発言を振り返りながら、希望の未来を願うヒロシマの思いと苦悩をまとめています。

この本から 4 点明確にさせられ、心に残った文言があります。

その一つめは、「人間を抹殺する原爆に対して、生き抜いてきた広島市民の強靱な精神と平和を求める優しい心が作った都市の姿を私は『人間の賛歌都市』という言葉で表現したい」今までどちらかというと、ネガティブな面ばかりで広島を捉えていました。言語に絶する体験・経験の中、カープの樽募金は自分たちの希望であり、自分たちへの応援でもあったとのこと。だから負けても負けても応援し続けるのは、自分たちも負けずに生きていけるからとカープと一体となっていたのだと。生きていくだけで精一杯の毎日の中の樽募金もまた、強靱な生活の一部として人間の賛歌都市の姿が理解できます。

二つめは、「日本が戦争責任に関して、国家として歴史的な総括をせず、歴史的認識について国家的合意がないまま『戦後 50 年』を迎えてしまったことは「広島」にとって不幸なこと。国家が戦争責任や歴史的認識を曖昧にしているため、広島はその責めを一身に引き受け、身を屈して自らの被害の深刻さと核兵器の脅威をも負わされてしまった」このことは、市長として1回目の平和宣言の時アジアへの謝罪を明言しています。「日本はかつての植民地支配や戦争でアジア・太平洋地域の人々に大きな苦しみと悲しみを与えた私たちはこのことを申し訳なく思うと。さらに、広島が持っている意味は、単に被害者の側からだけではなく、同時に加害者でもある。加害者にして被害者という錯綜した立場、まずは自らをはっきり位置付けること」だと。国がこの戦争での「加害」と「被害」を曖昧にしていることで核兵器による被曝も曖昧になってしまい、同質に扱われ被曝に対する風潮被害に新たな苦しみを増長さ

せ、何ら被曝での補償も考えてこなかったことが理解できました

三つめは、著者は新聞記者として、長年、被爆者への取材を重ね、1963年、東京地方裁判所が原爆投下を国際法違反だったと結論づけた「原爆裁判」の取材にもあたっています。被爆から50年1995年オランダ・ハーグでの国際司法裁判所で、核兵器の使用の違法性について審理が行われました。その時著者は長崎市長と共に広島市長として審理に参加し意見を述べています。こうした経験から、原爆投下の「責任」を強く意識するようになったといえます。国際司法裁判所での発言は以下の通りです。

「核の巨大な破壊力によって、まったく罪のない市民が焼き尽くされ、放射線をあび、老人も女性も生まれたばかりの赤ん坊も殺されました。このように悲惨で残酷な大量虐殺の行為でさえも、歴史の中で正当化されています。この行為は本来国際的に問題にされなければならない事柄なのです」と。新聞記者らしく「真実」を忖度しないで認識し、アメリカの原爆投下の責任に目を向け憎しみではなく、過去の歴史を学んで、2度と繰り返さないということと、なぜそういう過ちが起こったのか、その過ちを起こした責任についてきちんと明らかにしていくということが、核兵器のない未来をつくることができると主張し続けていることが分かります。

四つめは、教育の問題。「日本人の選民意識(アジア地域での一等国民である)を育てた教育や人権意識の欠如、戦場での異常心理などが大きな要因であったし、私たちはそのことを人間として恥じ率直に反省し謝らなければならない。それを広島・長崎への原爆投下と同じ次元で論じては因果報復論になってしまう」恐ろしいことに教育によって国民はどんなにでも作られてしまうということ。

最後に著者は「日本人はいかに生きるべきかと言った大上段に構えた問いを発しているのが広島である。破壊のための核爆弾をつくるのは人間、しかし鶴を折るのも人間。私はそこに希望を見出している。広島の地道な努力の積み重ねが核兵器反対の国際世論のうねりを超えて、核保有国の間で核兵器廃絶を約束する条約が結ばれた時、私たちは新たな希望の時代へと足を踏み入れることができる」と1996年7月22日にまとめています。その後、核兵器禁止条約は、国連の下での交渉会議の結果2017年7月7日に採択・2021年1月22日に発効・2024年ノーベル平和賞受賞へと続いています。「人間の賛歌都市」と表現された広島の人々の長年の地道な努力が、希望の実現へと向かわせています。

私も改めて、視野を広げて歴史をきちんと学ぶ姿勢と、多面的な視点から事象をとらえられる考える力を育てなければと痛感しました。

吉川先生は、聖徳太子「十七条の憲法」第十条の「我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ」から「凡夫」の解釈をしてくださいました。意見が対立したときに持つべき対話の心構えが示されているようで、「私が聖者であるわけではない。彼が愚かであるわけではない。お互いに凡夫でしかないのである」という意識を自覚していれば「許せる」根本が見えてくるとおっしゃいます。そのために「対話」の連続が求められると。

凡夫同士の対話なら自ずと「許せる」行為が生まれてくるのではないのでしょうか。そういう凡夫でありたいし、対話ができる人でありたいと願わずにはおれません。対話を続けるためには相手の思いや考えを理解し、応えていくためにはまた自分の思いや考えを明確にしていかなければなりません。単純で手っ取り早い暴力行為に走るのではなく、じっくりと思慮深

く、思いや考えを多様で柔軟に修正しながら前進していくことが求められるのではないのでしょうか。それには焦らない時間も求められるはずです。

◆ 【 MM 】

『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』 庭田杏珠・渡邊英徳／著

戦争はそれまでの日常を根こそぎ奪う。

私が今月選んだ本は『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』である。撮影当時は白黒であった写真をカラー化することでそれぞれの暮らし、出来事がさらに生き生きとしてくる、訴えかけてくる。

1936 年に撮られた写真の1枚、原爆ドーム(広島県産業奨励館)があった元安川沿いの写真からそのあたりは埋め立てられて砂浜のようになっていたと知った。写真には砂遊びをする姉弟が映っているが原爆投下後は人々が水を求めて川を埋め尽くしたのだろう。同じ年に撮られた盆灯籠売りの写真では盆灯籠と周りで遊ぶ子どもが写っている。盆灯籠はカラーで見て改めて広島だなあと感じる。初めて盆灯籠を見たときはコンビニエンスストアでも売っておりこれは何に使うの?と友達に聞いたのが懐かしい。写真の子どもたちの服装は淡い色合いのワンピースだ。白黒写真では黒の濃淡だけだがカラーになると現在の服装と言われなくても不思議ではないくらい時の隔たりを感じない。時代を感じるのは子供のおかっぱ頭くらいか。今年も盆灯籠を店先で見た。90年前も現在も変わらないものもある。

この本にはアメリカにあった日系人収容所の写真も何枚かある。カリフォルニア州、アーカンソー州、アイダホ州の各地で取られた写真には笑顔で遊ぶ子どもや体操をする人々が写っていた。写真の人々は身なりもこざれいで時には笑顔が見られる。裕福な暮らしをしていたのかと想像する。1945 年に撮られた写真で収容所から自宅に戻った日系人の写真には家の壁にひどい言葉が書かれていた。戦争は国と国との争いだからそれまでの人間関係も変えてしまうだろう。その土地で頑張っていた人たちが経験した想いや苦労はどんなものだったろう。

1945 年に撮られた写真からは空襲がいたるところで行われていたと知る。3 月 10 日東京大空襲、B-29 300 機襲来。3 月 13 日大阪大空襲、夜中に B-29 274 機襲来。3 月 17 日神戸大空襲、約 3 万 4000 発の焼夷弾が投下された。3 月 19 日呉軍港空襲、アメリカ軍の艦載機 350 機が来襲。呉は軍港だったので空襲もたびたびあった。5 月には徳山空襲。空からの写真は真っ黒の煙と炎で地面を埋め尽くす。広島原爆の日のきのこ雲の写真は白黒とカラーの両方があった。呉市吉浦町から撮影されたものだ。広島から吉浦は離れているのに大きなきのこ雲が迫りくる大きさを撮影されていた。AIがカラー付けしたのは白だったが、資料や見た人の指摘からオレンジ色に手作業で変更していった。8 月 8 日福山大空襲、B-29 91 機の攻撃により福山市民の 82%が被災した。焼けた町と青空の対比が惨劇を物語る。8 月 9 日の長崎原爆のきのこ雲もカラーで載っていた。8 月 14 日の岩国空襲で写っているのは地面に無数に広がる爆弾孔だ。100 機以上の B-29 が来襲。8 月 15 日小田原空襲は

伊勢崎または熊谷を攻撃した部隊が余った爆弾を投棄したものと推測されている。その日は終戦の日ではないのか。その当日にも攻撃されていたとは。沖縄の写真も多く、アメリカ軍が撮影した写真には住民や捕虜収容所などの写真もあった。

本の最後に載っている写真は広島原爆投下から1年後に福屋屋上から撮られた写真。焼野原と屋上から街を望むカップルが写っている。町はまだ悲惨な状態だが写る2人の背中はどこか楽し気に見てとれる。あれから80年。日常のありがたさを維持していきたい。昔に起こったことはなかったことではない。忘れないように伝えていきたいしこれからも知っていきたいと思う。